

かかわり合う力を育てる保健体育指導の在り方

－コミュニケーション活動を通して－

飯塚宏一 高橋祥子 宮澤玲子

1 研究テーマ設定の趣旨

様々な環境変化が激しい現代社会では、かつてあったような家庭や地域社会で育み築き上げられてきた人間関係を結ぶことが難しくなっている。こうした社会現象は、人とかかわる機会を減らし、他者や自己への気づきと感受性の減退をもたらすものと考えられる。最近の生徒たちにとって、これらのことを身に付ける機会は、学校での授業の他には意外に少ない。そこで昨年度から保健体育科では、生徒が自ら人とかかわろうとするために必要なコミュニケーションスキルを身に付けられるような授業を実践してきた。

保健分野においては授業形態を変え、課題解決学習の中にGWTを取り入れ、話す・聴く・コンセンサスを得るなどの体験を通し、人とのかかわる楽しさを味わえるよう工夫した。体育分野では、授業の始めや学校行事において、対人関係ゲームを積極的に活用し、友達と触れ合う良さ、ノンバーバルコミュニケーションの大切さを体験させてきた。

今年度は、昨年度着目した「話す」と「聴く」という要素を、スタディスキルの一つであると認識し「伝え合うスキル」としてとらえた。学習過程で考えたことや感じたことが相互交流できれば、互いに気づきがあり学習が深まると考えたからである。そこに共同研究のテーマでもある「ともに学ぶよさ」が生きてくる。伝え合うことが、互いの学びにつながり、生徒の思考を深化させることができるのではないかと考える。

コミュニケーション活動を通して、生徒が自らの問いから主体的に学習に向かい、仲間とともに知的刺激を与え合いながら学ぶことができる授業展開を目指して、上記テーマを設定した。

2 研究計画

1 第1年次（平成17年度）

- (1) 保健体育科で捉える「コミュニケーション力」について
- (2) コミュニケーションスキルを身に付けさせるための授業改善の手だて
- (3) 手だてに基づく授業実践

2 第2年次（平成18年度）

- (1) 身に付けたコミュニケーションスキルを活かす授業展開
- (2) 授業改善のためのオーセンティック・アセスメント

3 第3年次（平成19年度）

- (1) 効果の測定（対人関係能力）と検証
- (2) 研究成果と今後の課題

3 研究内容

1 体育授業におけるオーセンティック・アセスメント

研究主題とのかかわりから、私たちは教師の専門的力量を次に挙げる二点に着目して授業改善をすることにした。①生徒の主体的学習や集団的なかかわりを生かす、学習スタイルや学習形態の選択が適切になされているか。②肯定的な人間関係と情意行動を生み出す指導やコミュニケーションスキルの指導が適宜なされているか。

以上のことがどれくらい実現されたか知る手だてとして、オーセンティック・アセスメントは不可欠である。私たちは、診断的評価としての状況把握と総括的評価としての成果把握を比較検討するとともに、各時間の授業を形成的に評価し計画修正や生徒の学びの実態を把握した。

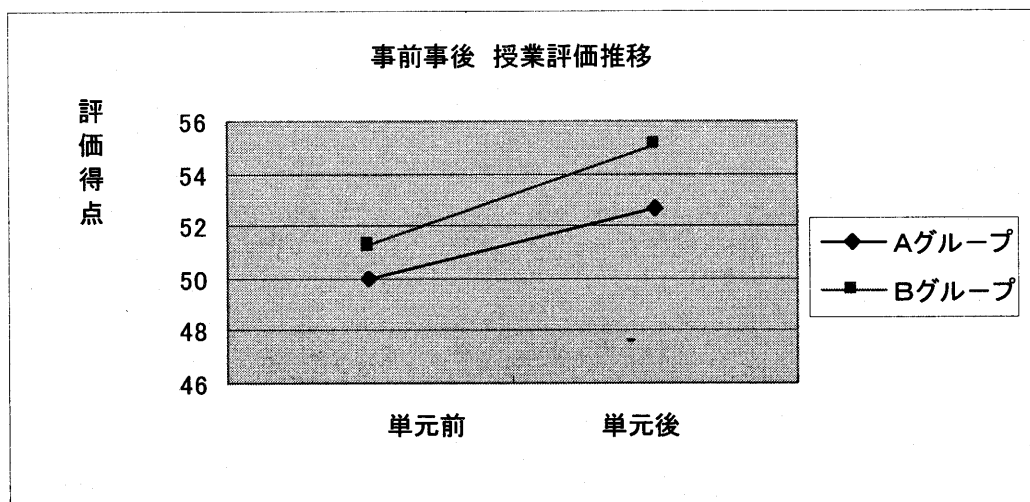
以下に「1年女子サッカー(5時間)」の評価結果を示す。

- ・ Aグループは、意図的グループ40名（人間関係を考慮せず機械的に組んだ）
- ・ Bグループは、任意的グループ40名（生徒自身が気の合う者同士で組んだ）
- ・ (1) (2) (3) いずれの評価もそれぞれの項目を「はい」「どちらでもない」「いいえ」の順に、3・2・1点と得点化して算出した。

(1) 診断的・総括的授業評価（4因子20項目・3件法）

	単元前		単元後	
	Aグループ	Bグループ	Aグループ	Bグループ
Q3 楽しく勉強	2.50	2.69	2.74	2.94
Q5 丈夫な体	2.72	2.79	2.74	2.92
Q12 精一杯の運動	2.61	2.67	2.58	2.78
Q8 明るい雰囲気	2.36	2.46	2.45	2.72
Q16 練習時間	2.42	2.33	2.42	2.61
たのしむ（情意目標）	12.61	12.95	12.92	13.97
Q2 いろいろな運動の上達	2.47	2.51	2.58	2.86
Q7 できる自信	1.92	2.23	2.47	2.53
Q11 運動の有能感	1.61	1.69	1.82	2.00

Q13 自発的運動	2.50	2.51	2.66	2.83
Q17 授業前の気持ち	2.17	2.33	2.53	2.56
できる (運動目標)	10.67	11.28	12.05	12.78
Q9 応援	2.56	2.79	2.71	2.81
Q6 作戦を立てる	2.58	2.69	2.76	2.86
Q10 他人を参考	2.81	2.62	2.71	2.83
Q15 友人・先生の励まし	2.61	2.69	2.71	2.86
Q20 積極的発言	2.31	2.18	2.56	2.56
まなぶ (認識目標)	12.86	12.97	13.45	13.92
Q4 ルールを守る	2.97	2.90	2.92	2.94
Q18 自分勝手	2.58	2.67	2.82	2.78
Q1 勝つための手段	2.64	2.82	2.95	2.83
Q14 勝負を認める	2.75	2.82	2.68	2.92
Q19 約束ごとを守る	2.89	2.87	2.87	2.94
まもる (社会的行動目標)	13.83	14.08	14.24	14.42
総合評価	49.97	51.28	52.66	55.08



〔中学校段階の各項目・次元の得点に関する診断基準〕

項目名	+	0	-
たのしむ (情意目標)	15.00 ~ 12.11	12.11 ~ 9.86	9.86 ~ 5.00
できる (運動目標)	15.00 ~ 11.28	11.28 ~ 8.80	8.80 ~ 5.00
まなぶ (認識目標)	15.00 ~ 11.95	11.95 ~ 9.72	9.72 ~ 5.00
まもる (社会的行動目標)	15.00 ~ 13.48	13.48 ~ 11.48	11.48 ~ 5.00
総合評価	60.00 ~ 47.45	47.45 ~ 41.22	41.22 ~ 20.00

学び合い活動を通して技能を伸ばすことをねらいとして授業を計画したが、診断的授業評価はA B両グループとも“できる”が“0”意外すべての項目で“+”の評価であった。中でも“まなぶ”と“まもる”は比較的评价点が高かった。

そこで“まなぶ”の中でも低値を示した「自分勝手なことはしない」を向上させながら、“できる”の具体項目である「できる自信」や「運動の有能感」を高めていこうとした。

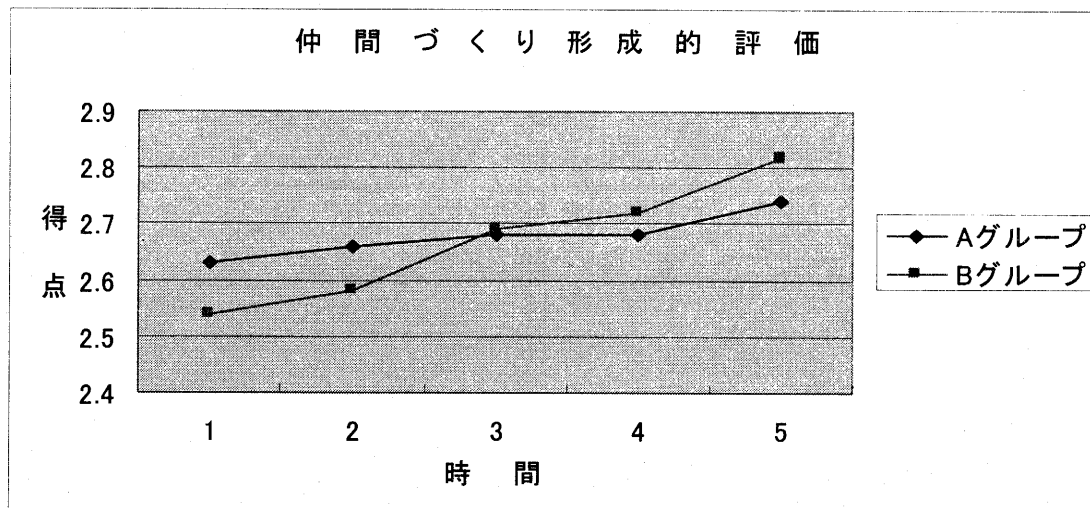
単元後の結果では、すべての項目で“+”の評価となり単元前と比べ評価点も向上した。総じて気の合う者同士で組んだBグループの方が評価点が高く、「楽しく勉強」「丈夫な体」という“たのしむ”因子と、「ルールを守る」「勝負を認める」という“まもる”因子が高かった。さらに授業に自主的にかかわれるような内容にしたり、教師のかかわり方を検討して、「運動の有能感」を向上させていく必要がある。

(2) 仲間づくりの形成的评价 (5因子10項目・3件法)

これまでどちらかといえば、体育において周辺的に扱われていた人間関係や仲間づくりに着目した授業を実践する上で、これらを成果として実現するためには、仲間づくりに焦点をあててアセスメントする必要があると考える。

10項目で構成される質問の因子は、「集团的達成 (Q1,2)」「集团的思考 (Q3,4)」「集团的相互作用 (Q5, 6)」「集团的人間関係 (Q7,8)」「集团的活動への意欲 (Q9,10)」である。

授業時間数		1	2	3	4	5
平均得点	Aグループ	2.63	2.66	2.68	2.68	2.74
	Bグループ	2.54	2.58	2.69	2.72	2.82



一般的な授業成果の目安は、平均得点が2.5点以上である。2点を下回る場合、生徒はもの足りなさや非協力的という印象をもっていると考えられている。単元が5～6時間扱いの場合、得点は右肩上がりになるのが通常である。

本校の場合、単元初めは任意集団（気の合う者同士）のBグループの方が意図的集団

(機械的に組んだ) A グループより評価得点が低かった。しかし授業が進み、作戦を立てたり協力してゲームに臨むなど集団での活動が長くなるにつれ逆転した。

因子別にみると、両グループとも集団的思考と集団的相互作用が低く、集団的人間関係は高かった。

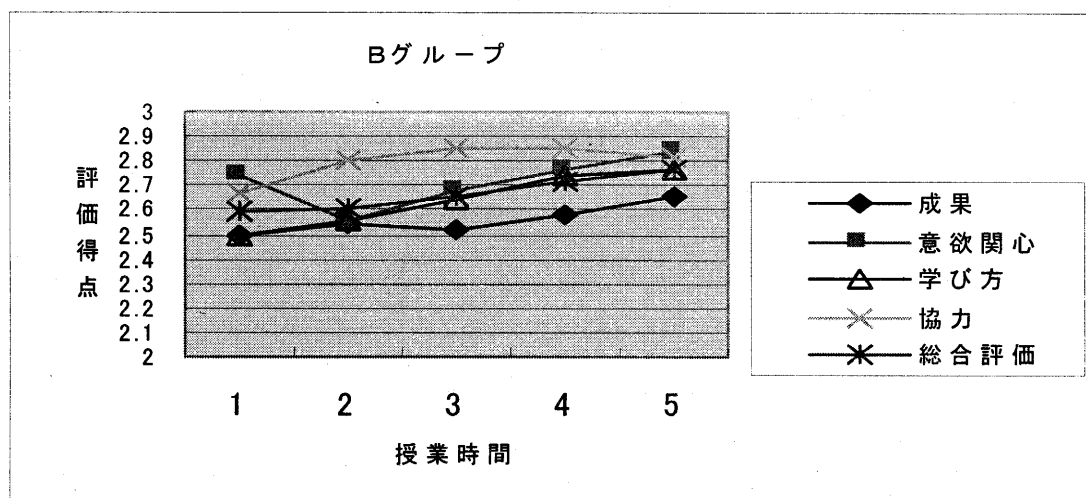
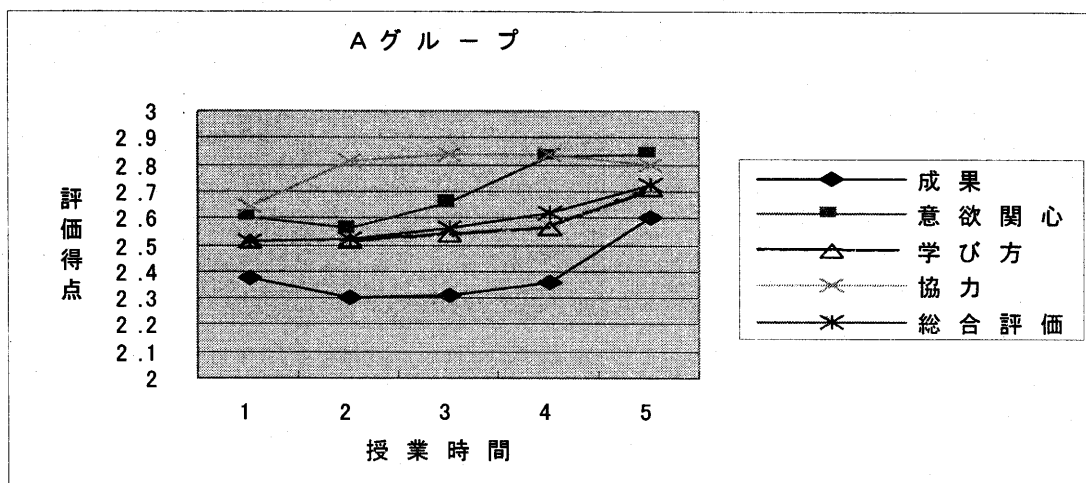
単元を通しての得点の伸びは、A グループが 0.11、B グループが 0.28 で B グループの方が大きかった。単元の終わりに近づくにつれ、気の合った者同士の方がことば以外の方法(表情・動作・アイコンタクト等)でのコミュニケーションが多くとられていたことから、このような結果になったのではないかと考えられる。

(3) 体育授業についての形成的評価 (4次元9項目・3件法)

調査項目は、「成果」「意欲・関心」「学び方」「協力」から成り立っている。特に「協力」の仲間に関することは、友だちとの人間関係を評価するもので「関心・意欲・態度」として扱われている。しかし体育授業では、人間関係のあり方が学習に大きく影響してくるので、ひとつの次元として評価した。

	1		2		3		4		5	
	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B
感動の体験	1.92	2.24	2.34	2.54	2.31	2.54	2.31	2.57	2.47	2.62
技能の伸び	2.61	2.61	2.46	2.46	2.46	2.49	2.46	2.51	2.71	2.65
新しい発見	2.58	2.63	2.09	2.62	2.17	2.54	2.31	2.65	2.61	2.70
成果	2.37	2.49	2.30	2.54	2.31	2.52	2.36	2.58	2.60	2.66
精一杯の運動	2.53	2.66	2.54	2.62	2.69	2.68	2.86	2.73	2.84	2.84
楽しさの体験	2.67	2.82	2.57	2.49	2.63	2.68	2.80	2.81	2.84	2.84
意欲・関心	2.60	2.74	2.56	2.55	2.66	2.68	2.83	2.77	2.84	2.84
自主的学習	2.61	2.53	2.66	2.51	2.69	2.62	2.71	2.78	2.82	2.78
目あて学習	2.42	2.43	2.37	2.59	2.40	2.65	2.40	2.70	2.61	2.73
学び方	2.51	2.50	2.51	2.55	2.54	2.64	2.56	2.74	2.71	2.76
仲良く学習	2.81	2.82	2.86	2.78	2.91	2.84	2.91	2.84	2.87	2.81
協力的学習	2.47	2.53	2.77	2.81	2.77	2.86	2.77	2.86	2.74	2.84
協力	2.64	2.67	2.81	2.80	2.84	2.85	2.84	2.85	2.80	2.82
総合評価	2.51	2.59	2.52	2.60	2.56	2.65	2.62	2.72	2.72	2.76

〔単元過程における形成的授業評価の推移〕



Aグループの成果が平均して低いのは、授業時間が進んでも感動の体験や新しい発見が少なかったからで、技能習得が中心となる単元初めの1・2時間目にそれがよく現れている。

両グループとも平均して協力の評価得点は高いが、その項目をみるとAグループは教え合ったり助け合ったりという協力的学習よりも、仲良く学習できたという評価が高く、Bグループはその反対であった。生徒の様子から、5時間目に協力の評価が低くなったのは、集団活動の時間が長くなりゲームの勝敗が関係してくると、互いの要求レベルが高くなり評価が厳しくなったことも一因であると考えられる。

2.77以上は概ね大変評価の高かった授業である。2.33以下は反省すべき点がある授業である。性別や教材によって有意差が出る項目があり、評価点は男子より女子、運動種目の中ではボール運動が若干高くなるといわれている。

2 人とかかわる力を育てる授業実践

(1) 保健分野

1年生の保健学習における学習内容は「心身の発達と心の健康」であり、(1)身体機能の発達、(2)生殖にかかわる機能の成熟(3)精神機能の発達と自己形成、(4)欲求やストレスへの対処と心の健康と大きく四項目に分けられる。

対人関係を深める学習としては、(2)での異性とのかかわり方や思春期の心の発達も関係してくるが、本実践は(3)・(4)を中心に実施した。

ア 指導計画 (学習項目・内容)

時	(3) 精神機能の発達と自己形成 (4時間)	
1	「考え、感動し、決断する心」	
2	「人とのかかわり」自立と依存・人間関係の変化・効果的なコミュニケーション	
	① 自立の欲求 依存と自立 (心理的葛藤) 自己の認識(親友・価値観・考え方) 人間関係の変化	② 思春期の特徴 GWT (体験学習) コミュニケーションスキルの確認
4	「自分らしさ」	

時	(4) 欲求やストレスへの対処と心の健康 (3時間)	
1	「欲求やストレスの対処法」	
	① ストレスとは (理論) ストレスの原因とストレス反応 心と体のつながり	② ストレスの対処法 (体験・クロス学習) リラクゼーション 自律訓練法 (体験)
3	「心身の調和」心と体をほぐす (クロス学習)	

イ 授業の実際

ここで紹介する実践例は、(1)「精神機能の発達と自己形成」における人とのかかわりで、GWTを取り入れた授業と、(2)「欲求やストレスへの対処と心の健康」の指導計画である。

(7) 「人とのかかわり」効果的なコミュニケーション展開例

学習内容	生徒への支援・助言
1 前時の確認と本時の学習内容把握を行う。	・ 思春期の心の発達の特徴を確認する。 自立・依存・友人関係の変化 (T1)
2 ウォーミングアップを兼ねたグループ抽選を行う。	・ グループ編成時の約束事を徹底させる。 (T1) ・ グループを見つけれない生徒にヒントを与える。 (T1・T2)
3 GWT「謎の宝島」を行う。	・ 課題達成に向け、情報交換の留意点を意識させる。 情報交換の仕方・聴く態度・話しやすい雰囲気 協力する姿勢 等 (T2)

4 課題の正解を確認する。	・グループ間を巡回し、円滑な活動を促す。(T1・T2) ・正誤にとらわれず活動目的を意識させる。(T2)
5 各自ふりかえりを行う。	・活動ポイントを押さえて記入させる。(T1・T2)
6 ふりかえりを発表する。	・学びの共有化を図れるようにする。(T1)
7 「人とのかかわり方」についてまとめる。	・対人関係に必要なスキルを整理させる。 聴く・話す・協力する・共有する (T1)

(T1：教科担任 T2：養護教諭)

本時の指導において自己形成へ向け考えさせたいことは、人と上手くかかわるための効果的なコミュニケーションであり、感じとってほしいことは、自己存在感や自己肯定感である。これらのことを土台に、自分らしさ、ストレスの対処、心の健康といった学習へつなげようと考えた。

〔GWTの様子〕



開始直後：互いに距離がある



終了間際：自然と体を寄せ合い親密になる

GWTを取り入れた授業では、いつも黙っている生徒が、友だちに助けられて話したり勝手に喋りすぎる生徒は、場を盛り上げながらグループをまとめようとしたりする姿が見られた。

またどのグループも課題達成に向け、生徒同士で関連づけた話ができている。

コンセンサスを得るに至らなかったグループもあったが、ふりかえり用紙からは、親密さを増すなかで自分が役に立ったと感じたり、認めてもらったと感じたりしたことがうかがえた。

(イ) 「欲求やストレスへの対処と心の健康」指導計画

		目標	学習内容
欲求やストレス	1	<p>「ストレスとは？」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ストレスとその原因や反応について、自分の生活体験を基に理解することができる。 ・心と体は密接に関連し影響し合っていることが理解できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケート結果からストレスに対するクラスの現状を知る。 ・ストレスとはどんなものかブレインストーミングする。 ・ストレスの原因とストレス反応について、自分の生活を振り返って考える。 ・心と体のつながりについて知る。
対処法	2	<p>「ストレスの対処法」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ストレスの対処法はいろいろあることを理解し、自分にあったストレス対処法を見つけることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ストレスの解消法について発表する。 ・リラクゼーションの方法を知る。 ・自立訓練法を体験する。 ・自分に合ったストレスの対処法を見つける。
心身の調和	3	<p>「心と体をほぐそう」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・身体活動を通して、リラックスできることを実感できる。(心と体の関係) ・仲間と体を動かす楽しさと心地よさを味わうことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・心と体の関連を確認する。 ・腹式呼吸を体験する。 ・体ほぐしの運動をする。(一人で、二人で、三人で、みんなで) ・ペアストレッチをする。

「欲求やストレス」と「心の健康」の関連性を指導するにあたり、次のことを重視した。

- ①傷ついたり、怒りを感じたりするマイナスの感情は押さえてしまいがちだが、こうした感情自体は自然なもので否定しなくてもよいこと。
- ②マイナスの感情にも成長の種が隠されているということ。
- ③傷つくことがあっても、少々の傷ならそれをバネにして、さらに豊かで強い心を育てていくことができるということ。

「心と体をほぐそう」では、触れ合うことから始めるコミュニケーションを認識させた。言葉ではコミュニケーションがとれていない生徒同士でも、体ほぐしやストレッチを通じて、互いの体に触れながら心の交流へとつながっていく。また、思春期は体に触る・触られることに抵抗があるが、「授業だから仕方ない」と割り切るなど、強制的だからこそ生まれるコミュニケーションもあるのではないかと考えた。

その際、心と体のありよう(抑うつ・身体症状・対人関係など)を把握し、学習が進むにつれその変容を見ていくことは、発達過程を知るうえでも生徒を理解するうえでも意義があると考えた。

では保健学習によるこれらの様々な思考や感情は、思春期における自己形成にどのようにかかわっているのだろうか、以下の調査から考えることにする。

ウ CES-D調査

CES-Dは疫学的自己評価式抑うつ尺度で、精神健康の測定に広く用いられており、ポジティブ4項目・ネガティブ16項目の二大領域から構成されている。ネガティブ項目を構成する下位尺度は、抑うつ・身体症状・対人関係である。

スコアは0・1・2・3の4段階で、それぞれの該当項目の値を加算し、下位尺度得点と合計総合得点を算出する。ポジティブ項目は値を反転させて用いる。下位尺度も含め一般に女子が高く、性差は重要な検討課題である。

今回の調査は、プリ実験計画法で単一グループへのプリーポストテスト法を試みた。○は反応（測定）、「 」内は学習内容として、次のように実施した。

pre	post	post2
○「精神機能の発達と自己形成」	○「欲求やストレスへの対処と心の健康」	○

結果として以下のデータを得た。

		Total	Negative	depress	somatic	interpersonal	Positive
全体	pre	18.69	12.56	5.23	6.15	1.18	6.13
	post	22.62	16.41	6.33	8.74	1.33	6.21
	post2	19.18	12.65	5.15	6.85	0.95	6.23
男子	pre	17.05	11.11	3.95	6.00	1.16	5.95
	post	22.89	16.74	5.95	9.26	1.53	6.16
	post2	19.45	12.70	4.70	7.05	0.95	6.75
女子	pre	20.25	13.95	6.45	6.30	1.20	6.30
	post	22.35	16.10	6.70	8.25	1.15	6.25
	post2	18.89	13.21	5.63	6.63	0.95	5.68

T検定

p	CES-D	Negative	depress	somatic	interpersonal	Positive
全体 pre-post	0.01	0.01	0.11	0.001	0.61	0.85
全体 post-post2	0.05	0.02	0.13	0.01	0.18	0.75
男子 pre-post	0.01	0.01	0.05	0.004	0.52	0.71
男子 post-post2	0.11	0.04	0.17	0.03	0.34	0.44
女子 pre-post	0.37	0.28	0.79	0.08	0.84	0.94
女子 post-post2	0.24	0.19	0.001	0.13	0.36	0.69

(太字は有意)

(考察)

全体的にみた精神心理的健康度は、中学生のカットオフポイントが15/16であるので極めて悪いことになる。一般的に「自己をみつめる」「自分らしさとは何か」というような授業の直後は、寝た子を起こした状態になるので、一時的にCES-Dの値が悪くなると言われている。本調査もそれを裏づけるものとなった。

保健学習に関しては男子より女子のほうがよく反応し、有意性はみられなかったものの学習の前後で抑うつや対人関係、ポジティブといった項目により変化が現れた。

本校生徒の特徴として、自己評価が低く（特にテスト後）、ありのままの自分では親や

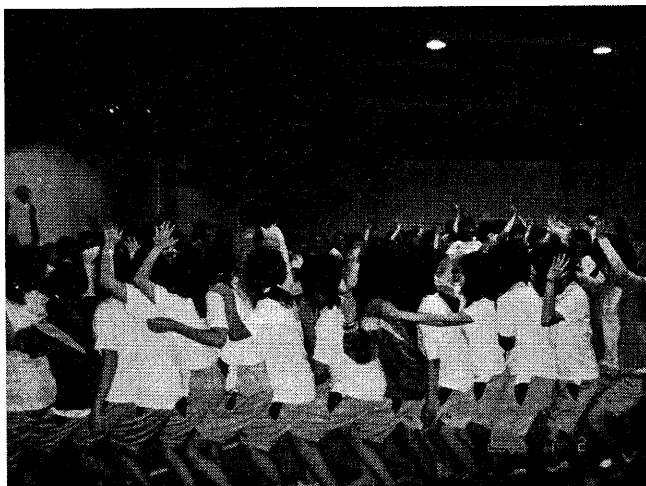
友だちから受け入れられないという不安が強いことがあげられる。そのため、頑張りすぎたり、飾りすぎたり、突っ張りすぎたりといったストレスの高い人間関係に陥っていることもデータに反映されていると考えられる。

(2) 体育分野

昨年(平成16年)の7月、第2学年(160名)を対象とした2泊3日の宿泊的行事として野外体験学習が実施された。この行事は、登山や野外炊飯など普段何事もなく生活している生徒にとって、共に協力し合い支え合う貴重な体験の場となっている。特に試行錯誤の中、失敗や成功を共有することで、ともに学ぶ関係を育てていくのではないかと推測される。

そこで体育科では、通常の授業における狭い枠にとらわれない活動ができるこの行事に意識的に体育的プログラムを取り入れることにした。実際には、体ほぐし運動に活用されているイニシアティブゲームを学年全体で実施し、160名の集団を任意(友人関係が成立していない者同士)の小集団10名に組ませ、1グループに1名の大学生リーダーを担当させ5種目程度のゲームを体験させた。

イニシアティブゲームとは小グループ(5~10人)が、一人では解決できない精神的・身体的課題に対して、一人一人が持っている諸能力を出し合い「知恵」と「勇気」と



「協力」のもとにその課題をグループで解決する活動である。望ましい社会性や問題解決能力、リーダー性を育てるのに有効なゲームである。

活動当初は、会話も少なく笑顔も見あたらずぎこちない様子であったが、時間の経過と共に互いに声を掛け合ったり、与えられた課題の解決に向けて積極的に協力し合う場面が増えていった。通常の

授業時間内では取り扱うことができない盛りだくさんの内容であり、時間をかけられるからこそその充実感を生徒たちは感じ取っていた。

ア 野外活動事前・事後における社会的スキル尺度得点の平均値と標準偏差

児童用社会的スキル尺度(1994, 庄司)を使用して、「野外体験学習」の事前(平成17年6月29日)、事後(平成17年7月4日)にデータを収集した。

下位尺度の内容は以下のとおりで、一般的にF1とF2は正のスキル(うれしいこと)、F3とF4は負のスキル(いやなこと)である。

F1: 共感・援助的にかかわり(14項目)で、友だちに感謝の気持ちを言う、困っていたら助ける、友だちをほめる、失敗したとき励まし慰めるなどからなる。

F2: 積極的・主張的にかかわり(11項目)で、友だちに対して注意する、迷惑なときはやめるように言う、自分の意見を言う、自分から声をかけたり遊びに誘ったりするなどからなる。

F 3 : からかい・妨害的かかわり (5項目) で、友だちに対して「ばか」などとけなす、失敗を笑う、邪魔をするなどからなる。

F 4 : 拒否・無視的かかわり (6項目) で、断る、見過ごす、自分のしたいことをするなどからなる。

質問項目は全部で36項目あり、項目得点は「いつもしている」に4点、「ときどきしている」に3点、「あまりしていない」に2点、「まったくしていない」に1点を与え、四つの尺度別に項目の得点を合計し、尺度得点とした。ただし、負のスキルについては、逆転項目として扱い得点を算出した。

	全体	男子	女子	性差	t
F 1 共感・援助的かかわり (14項目)	事前	44.22 ± 6.39	40.63 ± 6.38	45.77 ± 5.32	4.98 ***
	事後	44.79 ± 6.44	42.63 ± 6.82	46.92 ± 5.27	4.01 ***
	t	4.55 ***	3.60 ***	2.80 **	
F 2 積極的・主張的かかわり (11項目)	事前	32.76 ± 5.20	31.75 ± 5.51	33.75 ± 4.71	2.22 *
	事後	33.32 ± 5.25	32.50 ± 5.67	34.12 ± 4.70	1.77
	t	1.90	1.56	1.07	
F 3 からかい妨害的かかわり (5項目)	事前	12.09 ± 2.79	12.75 ± 2.95	11.43 ± 2.47	- 2.75 **
	事後	44.79 ± 2.68	42.63 ± 2.83	46.92 ± 2.29	- 3.40 ***
	t	- 3.96 ***	- 2.08 *	- 3.80 ***	
F 4 拒否・無視的かかわり (6項目)	事前	11.88 ± 2.97	12.94 ± 3.09	10.83 ± 2.45	4.98 ***
	事後	11.55 ± 3.00	12.27 ± 3.12	10.85 ± 2.29	4.01 ***
	t	- 1.48 ***	- 1.92	0.06	
合計得点 (36項目)	事前	117.02 ± 13.43	101.69 ± 13.56	112.26 ± 13.43	4.85 ***
	事後	110.19 ± 13.65	105.72 ± 14.03	114.60 ± 11.80	3.89 ***
	t	5.07 ***	4.09 ***	3.03 **	

+ p < .10 * p < .05 ** p < .01 *** p < .001

(分析結果)

① 事前・事後の変化

正のスキルの二つの尺度 (F 1 と F 2) 得点の平均値は増加し、負のスキルの二つの尺度 (F 3 と F 4) 得点の平均値は減少した。事前と事後の平均の差を、対応のある t 検定を用いて検定した結果、「F 1」と「F 3」及び「合計得点」において有意な変化が認められた。

② 性差について

正のスキルの二つの尺度 (F 1 と F 2) 得点の平均値は女子の方が高く、負のスキ

ルの二つの尺度（F3とF4）得点の平均値は男子の方が高い値を示した。事前と事後における男女の平均の差を、対応のないt検定を用いて検定した結果、4つのすべての尺度、及び「合計点」において有意な差が認められた。

（考察）

野外体験学習は、円滑な人間関係を構築していく貴重な経験の場となっていることが確認できた。特に試行錯誤の中、失敗や成功を共有することで、人間関係を育んでいくのではないかと推測される。このように、自然の中で活動し寝食を共にすることの教育的効果は、確実にあると考えられる。今後は、野外体験宿泊学習の活動内容をさらに精選し、より充実したものにしていくことで、さらに良好な人間関係構築の場になることと思う。自己の存在感の希薄化や他者とのコミュニケーションの困難さが指摘され続けている現在、野外体験学習ばかりに限らず日常の積み重ねである授業を通して、思いやりと愛情あふれるコミュニティを創っていく必要があると考える。

4 成果と今後の課題

今年度の研究を反省するにあたり、以下の二つの視点から考察する。

(1) 私たち保健体育科では、コミュニケーション活動を通してかかわり合う力を育てていこうとしたとき、まず必要なことは「話を聴く」態度の育成であると考えている。コミュニケーションによって学びが成立するためには、知識や理解といったことより人間関係の善し悪しの方が重要である。話をよく聴いてもらえて自分が相手に受容されていると感じられたなら、その後の話し合いは円滑に進むからである。このようなC・ロジャースのカウンセリング理論に基づき、授業を構築しアセスメントを実施した。

(2) 昨年度の反省及び課題は、気づきを促す問いかけの不足や共感的理解が不十分で状況への感受性が乏しくなりがちなことであった。この課題を解決するにあたり、話し合う場面を授業の中に設けるだけでは質の高いコミュニケーションは生まれないと考え、生徒の反応を予想して授業を組み立てるようにした。

成果として考えられることは、

① 友だちと体の触れ合いを通じたかかわり合いを持たせたことで、ことばによるかかわり以上に親密さを増し、豊かな人間性を養う一助となった。

② 特に保健分野ではコミュニケーションする力を生かして、思考の発展や深まりを促すことができた。

③ 人間関係が良くなり、授業の中でより自分を高めようとする姿が見られるようになった。

今後の課題として考えられることは、

① コミュニケーションする力を生かして、基礎的・基本的な技能の向上や体力の向上を図るには、集団的スポーツを中心に人とかかわる場面を意図的に増やすなどの授業工夫が必要である。

② 人間関係ばかりに目がいってしまうと、授業の中での新しい発見や感動体験が得にくくなり、生徒自身も技能の伸びを感じられないまま終わってしまう恐れがある。望ましい支援の方法を模索していかなければならない。

③ 保健分野においては、日々激変していく社会に目を向け、今の子どもたちに身に付けさせたい内容を厳選しなければならない。それらを各単元内容に照らし合わせ、発展的学習を視野に入れながら、分類・関連させて学習を展開していく必要がある。

引用・参考文献

- 「体育授業を観察評価する」高橋健夫 編 明和出版
「今こそ、新しい学校体育の創造をめざして」高橋健夫・友添秀則 編 大修館書店
「教えと学びを振り返る体育の評価」木原成一郎・大貫耕一 編 大修館書店
「体育科教育」第52巻第8号 大修館書店
「体育科教育」第52巻第9号 大修館書店
「体育科教育」第52巻第11号 大修館書店
「体育科教育」第52巻第12号 大修館書店
「発達の最近接領域の理論」ヴィゴツキー 著 土井捷三・神谷栄司 訳 三学出版
「協力すれば何かが変わる」坂野公信 監修 遊戯社
「中学校学習指導要領 解説－保健体育編－」文部省 東山書房
「人間関係づくりトレーニング」星野欣生 金子書房
「非言語的パフォーマンス」佐藤綾子 東信堂
「対人関係ゲームによる仲間づくり」田上不二夫 編 金子書房
「子どもの対人関係能力を育てる」津村俊充 教育開発研
「臨床心理学研究の技法」下山晴彦 編 福村出版
「授業スキル 中学校編」河村茂雄・粕谷貴志 編 図書文化
『楽しい体育』論の展開と生涯スポーツ」嘉戸 脩 タイムス
「体育授業の心理学」市村操一・阪田尚彦・賀川昌明・松田泰定 編 大修館書店
「考えるシート」山田ズーニー 講談社
「伝える力」久恒啓一・NPO 法人知的生産の技術研究会 編 すばる舎
「しぐさのコミュニケーション 一人は親しみをどう伝えあうか」
大坊郁夫 サイエンス社
「フィンランド・メソッド入門」北川達夫・フィンランド・メソッド普及会 経済界